

まえがき

著者	石田 正美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジ研選書
シリーズ番号	22
雑誌名	メコン地域 国境経済をみる
発行年	2010
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00016949

メコン地域 国境経済をみる

石田正美 編

まえがき

国境には「顔」がある。それは、もちろん目や鼻や口があるという意味ではない。すなわち、「顔」とは国境周辺の社会・経済状況が醸し出す独特の雰囲気であり、国境を訪れる人々が感じるであろうある種の共通の感触である。メコン地域の経済回廊を車で走り、いくつもの国境を越えていくなかで、筆者らはこのような感触を得た。

カンボジアとタイのポイペト＝アランヤプラテート国境では、双方の国境ゲートの間の中立地帯ではカジノの建物が林立する一方、タイ側のロンクア市場ではカンボジアから流れる安い品々が並び、市場に物資をリアカーで運ぶカンボジア人の往来が絶えない。ミャンマーとタイのミャワディ＝メーソット国境では、国境であるモエイ川の橋をわたる車や人々が多いこともさることながら、タイ側では一見邸宅と思われる敷地内が縫製品工場となっており、そこで働く労働者の多くはミャンマーから越境した労働者である。中越間の凭祥＝ランソン国境は、国境を往来する人々の数は多くないものの、ベトナム側のトラック積替所では、中国ナンバーのトラックからベトナム・ナンバーのトラックに貨物が積み換えられている。カジノ、国境周辺地域での工場、トラック積替所、これらは国境地域の光景をつくり出す要素であるが、それぞれの要素の濃淡、また国境地域の経済活動やその仕組みに対し、筆者らはある種の好奇心を掻き立てられた。

他方、メコン地域の経済回廊の開発が進み、タイとベトナムなどを陸路で輸送するための輸送実験がここ数年行われるなか、国境での通関時間を短くすることが、貿易円滑化の課題となってきた。また、同時にメコン地域各国は、国境地域を経済特別区に指定し、国境地域開発を積極的に進めようとしている。そもそも国境地域というと、経済発展のなかで取り残される傾向が強いように思われた地域であるが、こうした国境地域がこのように脚光を浴びようになってきている。

本書は、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイ、中国の雲南省と広西チワン族自治区の5カ国・2地域から成るメコン地域で、こう

した国境でのヒトとモノの流れの円滑化と国境経済圏開発に焦点を当てた2007年度「メコン地域開発研究－動き出す国境経済圏」並びに2008年度「メコン地域開発－経済回廊の新展開」の2年にわたる研究会の成果を取りまとめたものである。本書で特に焦点を当てた国境は全部で15国境、うち12国境はメコン地域で開発の焦点となっている東西・南北・南部の3つの経済回廊の主要な国境である。

実は、これだけの国境をくまなく調査することは、容易ではなかった。というのも、メコン地域で話されている主要な言語を挙げると、クメール語、ラオス語、ビルマ語、ベトナム語、タイ語、中国語と、タイ語とラオ語が似ているのでひとつとしても、英語以外の5カ国語が話されている。しかも、国境地域では、そのうち2カ国語が話されていることとなる。まず、研究会のメンバーは、これらの言語を話すことができる各国の地域研究者を少なくともひとり確保し、そうした研究者が国境地域でそれぞれの言語をサポートし合いながら、調査を進めなければならなかった。このため、調査はリレーでバトンをわたすような感じで進めていき、国境の片方の言語を話すことができる研究者が相互にサポートし合う体制を組むことで、何とか対処した。

これまで筆者らは、メコン地域に関する書籍として、石田正美編『メコン地域開発－残された東アジアのフロンティア』（2005年）、石田正美・工藤年博編『大メコン圏経済協力－実現する3つの経済回廊』（2007年）を出版している。第1の書籍では、各国の人的資源と産業に焦点を当て、第2の書籍では経済回廊に焦点を当て、本書はそれらの続編として「国境」に焦点を当てている。これまでと同様、本書も多くの地名並びに略語などが頻出するため、略語は冒頭の略語リストで整理し、本文中の地名はできるだけ地図上で示し、カタカナ・漢字とアルファベット名の対照表を、固有名詞とともに巻末でまとめるよう努めた。ただ、地図に関しては、あくまで読者の理解の一助となることを心掛けたものであり、厳密さを追求したものではない点、また読み方については、いくつもの読み方があるなかで、そのひとつを採用した点をご留意願いたい。また、本書は国境ないし越境に際しての社会問題として、麻薬や人身売買、少数民族問題など社会

的側面について触れている章もあるが、全体としては開発の側面に力点が置かれている。社会面についてはすでに洋書で書籍が出されており、そうした書籍で補ってもらうとともに、今後の研究に期待することとしたい。

このように本書が至らなかった点は多々あると思われる。今後の研究を進めていくうえで、ご批判並びにコメントなどを頂くことができれば幸いである。本書が出版される前年の2009年は日メコン年に交流指定され、2009年11月6日の日メコン首脳会議では、メコン地域を政府開発援助（ODA）の重点地域として、カンボジア、ラオス、ベトナムに対して3年間で5000億円以上の支援をしていくことが、日本政府により表明されている。その意味でも、本書がメコン地域の研究者の方々に加え、この地域の開発やビジネスに関わっていく方々、さらにはこの地域に関心をもっている読者諸氏の一助となれば、編者としてこのうえない喜びである。最後に、研究会を進めていくうえで、講師としてお越し頂いた方々並びに調査にご協力頂いた、内外の企業関係者および政府関係者の方々、編集に携わった真田孝之氏と永野康子氏に心からお礼を申し上げたい。

2010年3月
編者記す